

11月3日(土)文化の日、雨を心配していたが、結構いい感じの日となった。

藤江小学校と言えば、私が通い続けた6年間、懐かしいの一言の学校である。何げなく周りを見渡すが、正門の様子は変わらず、「あっ、そうそう」と親近感で見た。が、校庭に入ると、かなり広々としている。こんなに広がったかなあと、改めて学校の、逞しく成長した姿を見る思いでした。

講演は、藤江小学校体育館にて開催されました。取り合えず、内容を抜粋致します。

## 人権文化とは

日常生活の中で、お互いの人権(人間が人間らしく幸せに生きていくための権利)を尊重することを自然感じたり、考えたり行動することが家庭、地域、職場、学校などにおいて生活文化として定着していること。

### 現状は

- ・子供たちの人間関係・連帯感の希薄化や地域の教育力が低下。
- ・核家庭化に伴って家族等の死に直面する機会が少なく、生と死のもつ意味を考える機会が減少。
- ・現実と非現実、生と死の境目が非常に見えにくく、生命の尊さや命の重みを実感として捉えきれない子ども。

### 子どもの生死観

- ・5歳以下の子どもには「決定的な死」は存在せず、死についての意識、つまり死んだらこの世には帰ってこないことは理解できない。
- ・9歳以降ではじめて、死の普遍性と死の絶対性を受入れることができる。
- ・葬儀や墓参の経験は健全な死生観の確立に貢献する。
- ・家族に大切にされない子どもは、死の普遍性の認識が低い。
- ・死の普遍性(自分を含めた全ての生命にやがては死が訪れる)が確立していない子どもは
  - ①自殺や他殺を許容する。      ②死への恐怖がない。
  - ③殴ったり殺したりするゲームをする子どもは、しない子どもにくらべて希薄。
  - ④「命の大切さ」についてあまり、教えて貰っていない

### どうすればいいか

- ・大人が豊かでしなやかな感性をもち実生活において様々な他者との関わりを深め喜びや悲しみ、楽しみや苦しみ等の豊かな体験をし、命と向き合うことが大切。

#### 「感性を育む」「共生の心を」「多様性の容認を」

- ・かけがいのない「命があることをまなぶ(大切な人ものを失うことによる、命の有限性や死の不可逆性に向き合う)
- ・命のつながりを学ぶ(先祖から自分へと脈々と受け継がれてきた存在、自然と動植物との関わりの中で生きている)
- ・家庭や地域・学校で「いのちの大切さ」を実感させる教育を
  - ①心から実感させる。
  - ②生育過程を通して形成される心の奥底の実感的基盤があってこそ得られる。
  - ③体験の中で、実感が具体的な行動となって現れることを。

「命の大切さ」は生き方そのもの・・・ 「人権の集い」第2で